

# メソジストの精神と現代社会

清水 光雄

## 序

国教会の聖職者ジョン・ウェスレー（1703～91）を解釈する際、1980年迄のプロテスタント研究者と1980年以降の研究者の二つのグループがあります。第一のグループは1738年5月24日に与えられたアルダスゲイトでのウェスレーの信仰義認の体験を重視し、5月24日に近い日曜日に「ウェスレー回心記念日礼拝」を祝います。宗教改革者の「信仰義認」をウェスレー神学の中核とするこの第一グループは「信仰義認を強調し過ぎていないか」と、第二グループの1980年以降の研究者が批判します<sup>(1)</sup>。

第二グループは第一グループと同様にアルダスゲイト体験を重視しますが、同時に、ウェスレーの説教問題を取り上げます。ウェスレーの説教時期を三段階に分け、第一の時期を前期（1733 - 38）、第二を中期（1738 - 65）、第三を後期（1765 - 91）と捉え、前期の説教数は19、中期が51、後期が81で、ウェスレーの著述した生涯説教数は151となりますが、第一グループは信仰義認の立場を貫く中期の説教を重要視しましたが、第二グループは前期・後期の100の説教もウェスレー神学の思想的根幹ではないかと問います。

他方、東方・カトリックのウェスレー研究者はアルダスゲイト体験を特別視せず、ウェスレーはどの時期も同じ神学的主題、つまり、聖なる、愛に満ちた行為を主張し、「愛の実践を伴う信仰」（ガラテヤ5：6）がウェスレーの一貫したテーマであったと述べます。

第一と第二グループの相違を更に述べると、聖なる、愛の行為を重視した前期思想と信仰義認の中期思想の考えは異なっていますが、中期から後期迄、信仰義認の思想が一貫していたと第一グループは述べます。しかし前期と中期は個人の救いという視点で類似した考えを持ち、後期思想の特徴を全被造物の救いと理解すれば、中期と後期との思想は異なると第二グループは中期説教を重視する第一グループを批判したの

---

(1) 清水光雄『ウェスレーの救済論』（教文館、2002年）15 - 26頁（この書物を以下『救済論』と略記）と『民衆と歩んだウェスレー』（教文館、2013年）37 - 41頁（以下『民衆』と略記）を参照。

です。更に述べると、第二グループは東方、カトリックと同様、聖なる生活の基本的主題がウェスレーの生涯に鳴り響いていたと語ります。この視点から、第二グループは全期間の説教を重視し、思想的に「信仰のみ」と「聖なる生活」の統合を主張したのです。

国教会は16・17世紀に教父文献を収集し、そこから東方思想を熟知し、国教会の伝統で生きたウェスレーは聖なる生活の思想を東方から学びました<sup>(2)</sup>。聖なる生活は治癒的救済と神との類似性にその特徴があり、罪を病気と捉える東方は病気が癒されるように、罪から聖なる生活に徐々に成長・発展する人間形成の継続性を重視し、継続性の目標は救貧思想の実現者の神を模倣し、貧困者と一体化するキリストに倣い続けることでした。

ウェスレーは東方教父の作品を1720・30年代に多く読みましたが、2～3世紀のギリシャ教父としてオリゲネス、イグナティウス、アレクサンドリアのクレメンス等に親しみ、4世紀ではラテン教父のクリュソストモスやアウグスティヌスよりもシリアの修道士のマカリオスやエフライムを更に尊敬しました。

またウェスレーの祝祭として、19世紀の英国メソジストは組会（10月25日）と命日（3月2日）記念を祝い、按手礼（9月19日）祝祭を提案しましたが、実現しませんでした。そして体験を強調するシュライエルマッハ神学が出現した結果、英国メソジストはウェスレーの祝祭日を5月24日の回心体験の出来事だけに限定し、1938年以降、第一グループと同様にその出来事を毎年定期的に祝い、他の祝祭行事を排除しました。しかし、ウェスレー自身は5月24日の出来事を日誌に記述しましたが、この出来事を回心体験と呼ばず、日記や手紙、論集でも同様に考え、彼が出版した『辞典』でも「回心」を「罪から聖なる心と生活への徹底の変容」と説明し、後で述べるように、彼の神学の基本的主題である義認と聖化による救いの出来事を「回心」の言葉で解釈したのです。

このように、1980年以前の研究者は回心体験や中期説教・宗教改革の精神を強調しましたが、この解釈は「強調し過ぎ」と1980年代以降の研究者は批判し、宗教改革の精神・東方思想の影響と全期間の説教を強調し、筆者もこの立場に同意します。

今回の主題は「メソジズムの精神と現代社会」です。これから述べますが、メソジズムの精神は人間全体性の神学を示しています。【1】のテーマを理性と情感、【2】を法的救済と治癒的救済、【3】を個人と社会、【4】を魂と肉体、【5】を人間と創造全体と理解すると、各テーマの二項目の両者を強調したのがウェスレーですが、二項目の

---

(2) ウェスレーと東方思想との関係は『救済論』33 - 79頁と、清水光雄『ウェスレーをめぐる - 野呂義男との対話』（教文館、2014年3月出版予定、以下『ウェスレーをめぐる』と略記）の第三章の第一節を参照。

前者だけを重視したのがプロテスタント神学です。私たちは二項目をどのように理解するでしょうか。

二項目の後者を強調すれば、そこから現代社会の特徴が示されます。ウェスレーは貧困者・病人支援に生涯励み、現代的に理解するとメソジストは生活保護・高齢者・認知症問題等に関心を持つかもしれません。彼はまた無料診療所の責任者、医学書の著者でしたが、現代ではメソジスト系の病院が形成されており、あるいは彼がキングスウッドで教育活動に励んだように、今日もメソジスト系の学校・大学が構築され、彼は晩年、動物の福祉・究極的救済の宣教に励みましたが、現代の私たちも地球環境問題に責任が与えられているのでしょうか。では「メソジズムの精神と現代社会」を考えていきましょう。

## 1 ウェスレーの三つの信仰理解<sup>(3)</sup>

### 1. 理性的同意としての信仰理解（国教会の信仰理解）

ウェスレーが東方から学んだ思想に先行の恵み（聖霊の働き）があります。人間の如何なる行為にも先んじて、神がアダムの墮罪後の全人類に与えている、神の恵みの働きです。良き業は義認前でも救いに不可避です。良き業が行為義認にならないのは先行の恵みへの応答としての人間の働きだからです。キリスト教徒に限定されず、イスラム教徒も無神論者も、全ての人間に普遍的に備えられている神の恵みが先行の恵みで、この恵みで人間が理性的に思索・応答し、自分の救いの道に導かれます。「誰が英国人を異教徒に改宗させるのか」<sup>(4)</sup>と厳しい言葉をウェスレーはキリスト者に語りました。

メソジスト会員に「一日に2時間聖書を読みなさい」(*Letters*, 4:247)、説教者に「一日に5時間読書をしなさい」(*Works*, 8:315)とウェスレーは厳命します。聖書だけを読み、読書をしない説教者に彼は説教禁止を伝え、彼らは熱狂主義者だと言います。彼が400冊以上の書物を出版したのは、説教者も会員も読書で聖書の意味を詳しく学ぶことができたからです。彼は若き時代より全生涯、理性的同意としての信仰

(3) 『ウェスレーをめぐる』の第二章・第一節を参照。

(4) *The Bicentennial Edition of the Works of John Wesley*, editor-in-chief Frank Baker(Nashville: Abingdon Press,1984 - ), 20 : 445. なお以下の文章でこの作品はBEと略記し、*The works of the Rev. John Wesley, M.A.*, ed. Thomas Jackson (London : Epworth Press, 1829-31) は Works と略記、*Letters of the Rev. John Wesley, A. M.* ed., John Telford (London : Epworth Press,1931) は *Letters* と略記、John Wesley, ed., *A Christian Library : Consisting of Extracts from, and Abridgements of, the Choicest Pieces of Practical Divinity Which Have Been Published in the English Tongue*, 50 vols. (Bristol :Farley, 1749 - 55 ; reprint, 30vols, London : Cordeux, 1819-27) は CL と略記、*Survey of the Wisdom of God in the Creation, or A Compendium of Natural Philosophy* (5 volumes, 5<sup>th</sup> edition. London: Maxwell & Wilson, 1809) は *Survey* と略記する。

理解を強調したのです<sup>(5)</sup>。

## 2. 信頼としての信仰理解（国教会の信仰理解）

ウェスレーは神の赦しの愛を信じる信頼としての信仰理解をアルダスゲイト体験後、生涯にわたり強調しました。この信仰理解を強調するために彼は『克蘭マーの説教集』の一部を要約し、アルダスゲイト体験後の1738年11月に出版し、19版を重ね、彼自身の教理の一部になりました。神の恵みと憐みに「確かな信頼、信任」を説くこの説教集は述べます。「キリスト教信仰はキリストへの同意だけでなく、キリストの命、死、復活の功績への信頼です。・・・人間は神に確かなる確信を抱き、キリストの功績で罪が赦され、神の好意に和解されたのです」(BE, 1:121)。「キリスト教信仰はキリストへの同意」という理性的同意としての信仰理解だけでなく信頼としての信仰理解も主張されたのです。

## 3. 確証としての信仰理解

ウェスレーはアルダスゲイト体験を認識論として定義するために、1743年の論集で、信仰とは「全ての魂の目・耳・味覚・感情」であって、「信仰とは神から生まれたすべての魂の霊的感觉です」(BE, 11:46f)と述べました。彼が1720年代からロックに深く関わり、経験哲学を彼の宗教認識論の土台にしたことは周知の事実です<sup>(6)</sup>。彼は二種類の感覚理解、つまり、身体的感覚と霊的感觉（魂の目、耳、・・・）に触れ、前者の感覚で得られるのと同様に、後者の知識から論証的確さが伴い、確証としての信仰理解を主張しました。そして物質理解が身体的感覚で把握されるように、宗教理解も霊的感觉で与えられ、信仰は内的意識・知覚・自覚から成立し、この内的情感が宗教認識の本質になります。

ウェスレーは宗教的認識論を哲学的視点だけでなく、神学的にも検討しました。若き時代、ウェスレーは教父の作品を読み耽り、4世紀のシリアの修道士、マカリオスもその一人で、彼は「マカリオスの説教」の抜粋集を1749年の『キリスト教文庫』で出版しました。マカリオスは聖霊の神学、体験の神学を展開し、恵みを聖霊論的に基礎づけ、自覚的な聖霊体験で確証の伴う神認識を主張しました。人間は神と出会い、聖霊の働きで心の深みで神を体験し、霊的感觉による神認識に開かれます。キリストがこの世に到来した目的は「キリストが新しい心、新しい魂、新しい目、新しい

---

(5) 清水光雄『ジョン・ウェスレーの宗教思想』（日本基督教団出版局、1992年）36 - 94頁（以下『宗教思想』と略記）、『メソジストって何ですか』（教文館、2007年）、196 - 227頁（以下『メソジスト』と略記）、『民衆』28 - 34頁を参照。

(6) 『宗教思想』167 - 78頁、223 - 72頁を参照。

耳、新しい靈的舌を人間にもたらすためである」(CL、1:121)とウェスレーは抜粋集で述べました。

ウェスレーは信仰の確証理解を聖靈の証からも導きます<sup>(7)</sup>。「この靈こそは、わたしたちが神の子どもであることを、わたしたちの靈と一緒に証してくださいませ」(ローマ8:16)を通して、「わたしたちが神の子どもである」神の証と、「わたしたちの靈と一緒に証する」人間の靈の証の二つの証が共存します。神の子どもであることを知る私たちは愛・喜び・平和な情感的な確証体験を理解し、それを信仰の最も確かな認識方法と判断します。この認識方法で彼は情感 (affection) の言語を多く用います。

情感は人間の行動の原点ですが、情感は愛への行為を自分の内に発動させる源ではなく、隣人愛への行為は神の愛を体験することで初めて覚醒します。神の子どもであるとの確証を受けて、情感は行動への源が与えられ、隣人を愛する応答の人生 (貧困者支援) に向かいます。一般的に、プロテスタントは愛される体験を強調すれば、東方とカトリックは愛する体験を重視します。そしてウェスレーは愛されること (アルダスゲイト体験以降・情感) と愛すること (若き時代以降・理性) の両者を語り続けました。勿論、確証の欠如する理性的同意や信頼としての信仰理解も救われます。1790年頃、ウェスレーはアルダスゲイト体験時、確証の信仰理解を民衆に押し付けましたが、それは誤りだったと言います。

50年前弟チャールズと私は心の純粋性から英国の善良なる民衆に語った。自分たちの罪が赦された事を知っていないなら、彼らは神の懲らしめと怒りのもとにある。彼らが私たちに石を投げなかったことに・・・私は驚いている・・・私たちは従来のように真のキリスト者の共通の特権として確証を説教している。しかし私たちはそれを強制しない。確証を保持しない人々を弾劾し、棄却されると語らない<sup>(8)</sup>。

ウェスレーは生涯、理性証言を救いの一つの根拠にしましたが、それと同時に、1743年以降、情感的な確証証言に理性証言以上の認識論的立場を与えました。「神が人間に義・平和・喜びを満たして下さる聖靈の働きの靈感を私たちは確信している。・・・事柄の本質にとって、その靈感を知覚しないで…人間がこの平和・喜び・愛で満たされることはあり得ないと私たちは信じている。これが・・・メソジストの主要な教理です」(BE、26:181)。「聖靈の働きの靈感」とは人間の靈の証に与えられる論証的確かさを伴う靈的感覚で、「その靈感を知覚しない」ことはあり得ない、論証的な、確証的信仰理解なのです。

(7) 『ウェスレーをめぐって』第二章の第二節と第三節を参照。

(8) Robert Southey, *The Life of Wesley* [New York: W. B. Gilley, 1820], 1:258.

ウェスレーは理性と共に、それ以上に聖霊（情感）の体験を強調しました。脳の働きとの関係で言うと、彼は科学技術思考の「理性の機能」（左）と優しさ・共感への発展を目指す「感性の機能」（右）の両者を受け入れ、説教・聖書重視や貧困者への募金・医者派遣は理性的認識に由来しますが、苦しみ・悲しむ人の所に行き、目・耳・体全体を通して彼らと交わり、優しさ、共感へと成長する情感的認識をも求めました<sup>(9)</sup>。私たちは教会で理性と情感機能、あるいは愛する体験と愛される体験をどのように理解しているのでしょうか。

## 2 罪の赦し（法的義認）と聖なる生活（霊的聖化）

### 1. 信仰のみ（法的救済）と愛の生活（治癒的救済）<sup>(10)</sup>

国教会は義認（宗教改革）だけの救い、聖化（東方思想）だけの救いを語らず、義認と聖化の両者による救いを説き、宗教改革や東方思想と異なる伝統を築きました。ウェスレーもこの伝統で育成され、愛され・愛する人間形成を説きました。彼は宗教改革者と同様、裁判で被告に罰を与える法的義の宣告と同様に、神の前で罪を告白する人間を義とする法的赦し（法的救済）を信じましたが、愛の生活を語る点で宗教改革者と異なりました。他方、彼は愛の生活を重視する点で東方の思想に共鳴しましたが、マカリオスが原罪思想と信仰義認を否定した個所をウェスレーは抜粋集で削除し、信仰義認と愛の生活の両者による救いを語りました。

聖霊の働きに関し、信仰のみを語る西方教会は瞬間的義認としての聖霊の働き、愛の生活を語る東方は継続的聖化としての聖霊の働きに関心を持ち、他方、ウェスレーはこの両者の聖霊論を展開し、次のように語ります。「救いは地獄からの解放、天国に行くことではなく、罪からの解放です」（*BE*、11：106）。アウグスティヌスに繋がる西方教会の救済理解によると、信仰義認で罪が赦され、地獄から解放され、天国へと行きます。ウェスレーの時代でもルター派やモラビア派が同様の考えを述べ、罪からの解放、日々の生活の聖化を説きませんでした。彼は説教で言います。「救いとは何か。・・・死の向こうにある祝福ではない。・・・現在のことです。・・・私たちは『人間に与えられた聖霊で人間の心に授与される神の愛』を感じ（feel）、全ての人間に愛をもたらしたのです」（*BE*、2：156 - 8）。救いの主題は天国行きではなく、地上の現在の生活のこと、義認と聖化による救いの問題です。人間は瞬間的義認として聖霊による神の愛の働きを感じ、情感が与えられ、継続的聖化としての聖霊の働きに導かれ、隣人愛へと向かうのです。

(9) 『民衆』99 - 120 頁を参照。

(10) 『救済論』161 - 93 頁を参照。

## 2. 救いの中心的働きとしての恵みの手段<sup>(11)</sup>

恵みの手段と聞きますと、私たちは通常洗礼式と聖餐式を考えます。しかしウェスレーは国教会の伝統に従い、恵みの手段を敬虔の業と憐みの業の二種類に分けました。前者は説教、聖餐、聖書、祈り、断食、教会の活動等を意味し、後者は「最後の審判」と呼ばれるマタイによる福音書 25 章 31 節以下の、飢え・渇き・裸・病気の人々を癒す治癒的活動を示し、ウェスレーの言葉では、貧困者支援活動での病人訪問等を意味しました。二種類の働きから成立する恵みの手段で、人間の罪は赦され、人間を訓練し・力づけられます。彼はこの両者の恵みの手段を救いにとって必要不可欠と捉えましたが、モラビア派や予定論者の当時の福音主義者たち、更に中産階級になった後期のメソジスト会員、更に多くの国教会の人々も敬虔の業を訴え、憐みの業を軽視しました。この時代的情況の中で、ウェスレーは敬虔の業よりも憐みの業を強調し、既に記述した情感の言葉に訴えました。

情感は人間の行動の原点ですが、情感は単なる一時的感情ではなく応答的で、人間の行動を通して情感は継続し、この習慣化される傾向・持続的な性向をウェスレーは「気質」と呼び、気質が人間の基本的な性格を決定し、聖なる生き方を気質で示します。神と隣人愛への参加が人間の性格を聖なる気質に形成し、この聖なる気質を形成するのが恵みの手段です。ウェスレーは言います。「神と全人類への愛をもたらす、愛によって働く信仰を持たないならば、私は命に導く狭い道に存在せず、破壊に至る広い道にいます。・・・本質的に真の宗教とは聖なる気質そのものです。従って、異教、イスラム教、ユダヤ教、キリスト教であれ、更にはカトリック、プロテスタント、ルター派、改革派であれ、いかなる宗教であっても、気質を形成しない宗教は空虚そのものです」(BE, 3:306)。ウェスレーは真の宗教の本質的ゴールを聖なる気質と捉え、愛によって働く信仰を訴えることで、時代的情況から敬虔の業以上に憐みの業を強調したのです。

愛は玉座に座り、この玉座は神と隣人を愛する愛で、人間の心全体を満たし、全人類を愛します。玉座の近隣に聖なる気質が充満し、・・・気質の外延に人間の魂と肉体に仕える憐みの業が存在する。これらの業を通して私たちは聖なる気質全体を働かせ、持続的に発展させ、その結果、通常はそうに呼ばれないが、これらの働きは真の恵みの手段となる。そして憐みの業の外延に通常敬虔の業と呼ばれる働きがある。この働きは聖書を読み、聞き、人々の家庭的な、また個人的な祈りを為し、聖餐を受け、断食をし、節制することです。最後に、憐みの業と敬虔の業に仕える者は相互に効果的に愛、気質、良き業へと発展させるこ

(11) 『メソジスト』52 - 5 頁と『民衆』80 - 9 頁を参照。

とで、祝福の主は彼らを一つに教会に結束させる (BE、3:313)。

ウェスレーは教会形成の玉座を愛の実現に置き、それぞれの外輪に聖なる気質、憐みの業、敬虔の業と理解しましたが、私たちは教会形成の中心を説教・聖書と捉え、敬虔の業を大事にしますが、憐みの業や聖なる気質形成をどのように考えているでしょうか。そして引用文にあるように、当時の多くの福音主義者が恵みの手段を敬虔の業だと理解したため、憐みの業こそが真の恵みの手段だとウェスレーはその人々に訴えたのです。

### 3 救いの個人的側面と社会的側面

#### 1. 信仰義認による個人的救い

私たちは悔い改めや罪の自覚に悩み、神の救いの愛に出会い、信仰義認で救いを与えられます。救いが今与えられる喜び、救いの現在性、現在終末論の教えです。創世記1章に描かれる神の像を考えると、プロテスタントはこの主題で説教や講演会を余りしませんが、東方やカトリックではこの主題が主要な教理理解です。前期にウェスレーもこの教理を東方から学び、個人の神の像の回復を生涯の課題として求めました。人間は神の像として創造され、しかし墮落し、その結果、神の像の回復・再創造が求められます。この神の像の回復・再創造の一つの物語がウェスレーの貧困者支援活動でした。

当時の人々の平均年収は30ポンド(約57万円)で、メソジスト会員の25%が30ポンド以上、10%が30～20ポンド(約38万円)、65%が20ポンド(1日千円)以下で、現代の一日1ドル以下の絶対貧困と比べるとメソジストは厳しい状況でないかもしれませんが、ウェスレーの身近にいる貧困者とは彼自身のメソジスト集団で、彼の牧会的責任の範囲内の民衆でした。その意味で、彼は救いを「個人的な魂」と「社会的な改革」と捉えました。

一言で言えば、聖とは『キリストにある思いを持ち』『キリストが歩かれたように歩くことです』。いかなる変更もなく、この立場を私は60年間主張してきました。約50年前になって初めて信仰義認を明確に確信し、それ以降、毛の一筋ほどに動いたことはありません。・・・『信仰によって私たちは罪から救われ、聖とされるのです』(BE, 4:147f)。

ウェスレーが1730年以降主張する聖なる生活とは「キリストにある思いを持ち」(フィリピ2:5)「キリストが歩かれたように歩くこと」(Iヨハネ2:6)、つまり、キリストに倣うことに由来し、上記の聖書箇所を最高回数50回以上言及します(BE, 4:679)。また1738年以降、彼は信仰義認を語り続け、個人的魂の救いを語り、



最後の文言にあるように、罪の赦しと聖なる生活の両者を強調する国教会の伝統を強調したのです。

一言付け加えますと、ウェスレーは生涯国教会の教職で、国教会と共に、義認と聖化による救いを述べますが、国教会は聖なる生活・聖化を理性的な道德生活で理解し、そのため貧困者支援活動に積極的な対応をしませんでしたが、ウェスレーは信仰の確証理解から生まれる、応答としての支援活動に積極的に訴え、「国家を改革すること、特に教会を改革することで、聖書的聖を国家全体に根付かせる」(*Works*, 8:299) ことだと述べ、この宗教理解が国教会と異なる彼自身の貧困者救済理解でした<sup>(12)</sup>。

## 2. 「社会的改革」とは<sup>(13)</sup>

ウェスレーは述べます。「キリストの福音は社会的宗教以外の宗教を知らない、社会的聖以外の聖を知らない」(*Works*, 14:321)。キリスト教は社会的宗教そのもの、社会的聖そのものと語る彼は宗教的社会改革を、それとも政治的社会変革を述べているのでしょうか。答えは宗教的社会改革でしょう。彼は班会や組会、除夜会、愛餐会等の多くの支援組織を構成し、それぞれの会の相互支援と説明責任を求め、人間に苦しみをもたらす経済・政治的構造の変容を求めませんでした。前期の彼はトーリー(保守党)の政治的立場に立ち、政治的・経済的変革支援を支持せず、貧困問題とは労働者の最低賃金や国家の富の増強問題ではなく、イエスに倣うことだと理解しました。彼は宗教的社会活動に関心を持ち、しかも政治的次元に口を開かなかつたのです。このように前期・中期・後期のウェスレーは生涯、保守的な政治思想と貧困者支援活動に励みました。メソジストは

心と生活の聖を救いと考え、・・・「神を愛する者は人間をも愛します」。・・・従って、心から神を愛すれば、心を尽くして神に従います。・・・そして出来る限り多く、『飢えたる者に食物を与え、裸の者に着物を与え、病気や刑務所にいる人々を訪問する』ことで彼らの体に仕えるだけでなく、それ以上に、人間の魂にも良き業を人間は働くのです (*BE*, 9:35 - 41)。

ウェスレーは上記の「メソジストの性格」(1742)で義認と聖化を救いと捉え、神に愛されるものは隣人を愛し、「最後の審判」の聖書箇所を取り上げ、人間の体への配慮を徹底的に関わり、この体への吟味は魂への配慮に結び付くと語ります。私たちは通常、教会来訪者の魂の対応をまず考え、その後に体への配慮に触れますが、彼は憐みの業、体への支援活動を十分に語ることが魂への配慮になるとする点で、今日の

(12) 『救済論』187頁と『メソジスト』198 - 206頁と『民衆』42 - 9頁を参照。

(13) 『救済論』79 - 90頁、『民衆』68 - 75頁を参照。

経済的状況の違いで私たちとの相違が見られるかもしれません。ウェスレーは靈的救い（義認）に基づく宗教的社会改革運動を展開し、靈的救いに無関係な政治・社会活動に心を閉ざしました（BE、1：533f）。

但し、晩年のウェスレーは個人の神の像の回復だけでなく、全被造物の神の像の回復をも求め、動物の福祉と動物の究極的救いを真剣に求めたことを5で説明します。

## 4 魂と肉体の癒し<sup>(14)</sup>

### 1. 人間の魂（信仰）と人間の肉体（聖化）の精神的・肉体的健康

人間の「魂」だけに関心を持ち、歴史や自然、動物に配慮しないキリスト教に批判を向ける研究者がありますが、ウェスレーは人間の魂だけでなく人間の肉体にも多大な関心に向けました（*Letters*、6：327）。彼は医者ではありませんが、予防と治療に生涯関心を持ち、1746年に無料診療所を開設し、1747年に自然治癒書『根源的治療法』を出版、1756年には彼自身の設計で電気治療器具の制作を依頼しました。

ウェスレーはメソジストの家庭にあるべき二冊の本として『キリストに倣いて』（ケンピス）と『根源的治療法』を語りました。オックスフォード時代「イエスは方々を歩いて人々を助け」（使徒言行録10：35）を座右の銘とした彼は1726年頃ケンピスの書物に心酔し、1735年に翻訳・出版し、キリストへの倣いを宣教の中心としました。真の宗教はキリストに倣うことで、人間の内的本性を彼に教えた『キリストに倣いて』はメソジスト会員の精神的健康の原点になりました。

貧困者が自分の手で病気を癒せる自然治癒書の『根源的治療法』はウェスレーの生前に23版、死後15版、米国では24版を重ね、フランス語等に翻訳され、彼は多くの説教者に医学的知恵を学んでもらい、会員の肉体的健康維持を目指しました。この著書は『家庭医学雑誌』だと誤解する研究者もいますが、『キリスト教文庫』がメソジストの教理理解に多大な役割を為したように、『根源的治療法』も肉体的役割に多くの貢献を果たしたのです。

### 2. 司祭への要請（英国の歴史）

17世紀の国教会は司祭候補者に基本的な薬学研究を総合的宣教の一部として求め、ウェスレーの叔父も司祭、医者でした。医療に関心を持った彼はオックスフォード時代健康に関する書物を読み、ジョージアでは解剖に参加し、友達の肉体的健康にも関わり、治療と癒しに関心を示しました。自然科学に多大の関心を抱いた彼は<sup>(15)</sup> 予防

(14) 『民衆』137 - 63頁を参照。

(15) 『宗教思想』155 - 218頁を参照。

と治療の観点から医学の理論的形成よりも、予防と治療の実践的・実験的関心に興味を示しました。この視点から彼は医学のあり方と医師の診察方法に疑問を抱いたのです。

医学の方法に関し、当時の医者たちは仮説に基づく治療法を探求し、難解な理論を展開し、貧困者に読解不可能でした。英国の代表的医者シドナムの方法論は歴史上現れた種々の病気を調べ、それらがどのような症状を呈し、どのような治療が行われていたかを克明に記述し、病気が実際に治る具体的原因を知り、臨床実験に基づく自然治癒をシドナムは重視しました。彼から学んだウェスレーは治療に仮説は不必要で、具体的な実験的・経験的知識を求め、伝統的な治癒技術を探求したのです。

医者診察態度・効能・診察報酬などの件で、医者たちが患者と真摯に向き合っていないとウェスレーは批判します (BE、26：235f)。彼らは自分たちの富のために病人の回復を意図的に引き延ばし、利己的な願いにとりつかれ (BE、2：272)、患者の信頼性と期待を失い、「神を畏れる医者たち」であるべきだと彼は訴えます (Works、14：313,317,318)。彼が願う医学的書物は「治療を古代の基準に戻し、全ての仮説から治癒を解放すること」で、治癒書の内容は「安全で、安く、簡単な治療」(Works、14：310f) でした。しかし現実の状況では、「私が今なお困難を感じるのは、多くの貧しい病人が存在することです。多額のお金を使いながら、治療効果が少ないのです。・・・病人はやつれていき、ある家庭は崩壊し、治療効果は」なく、貧困者が捨てられていく状況でウェスレーは無料診療所を「異常的試み」(BE、9：275) として開設したのです。

ウェスレーは野外説教に励み、多くの巡回区で学んだことは医学的配慮の欠如のため、会員が病気に倒れ、死に至ることでした。病人の医学的助言と健康維持のため、彼は 1741 年頃から地域の医療支援ネットワークを形成し、指導グループの援助でメソジストは「苦しみの状態にいる全ての者」(BE、3：387) の定期的訪問活動を組織的に始めました。

私たちは教会で魂だけの癒し活動に参加しているのでしょうか、それとも、魂と肉体の両者の癒しの働きに関わっているのでしょうか。地域の訪問活動による魂の孤立・孤独死に対応し、隣人の健康維持に仕えることは教会の宣教なのでしょうか。

## 5 人間の救いと創造全体の救い<sup>(16)</sup>

### 1. 死生観

人間が死ぬと「天上」に導かれ、動物等は魂の欠如故に、天上に行けません。ウェスレーは後期迄この理解を受け入れましたが、晩年は被造物全体の回復・変容を目指す新しい天と新しい地の「新天地」の考えを展開しました。それでは彼は動物の魂をどのように理解したのでしょうか。

### 2. 動物の魂

動物の魂を拒否した神学者にアウグスティヌスがありますが、動物の魂保持を主張する英国の学者としてクラークやハートリー等の当時の少数意見をウェスレーは知り、全被造物の回復・万物の完成を説く東方のエフライムから動物の魂の問題を学びました。またこの件に関する論争が大学で行われ、彼自身も「ウォール講座」で講義をしましたが、講義資料が残存しないため、彼の立場は不明確ですが、動物は魂を持つことを弁護したと思われます。そして説教「三位一体」(1775)で同様な動物魂保持を彼は再確認しました (BE, 2:382)。

### 3. 終末論

キリスト教に二つの終末論、千年期前終末論と千年期後終末論があります。千年期とはキリスト教では黙示録 20 章に出てきますが、ウェスレーの前期から後期迄は国教会と同様、前者の立場を受け取り、この立場を説教集の序論で示しました (BE, 1:105)。しかし 1775 年に弟子のフレッチャーから前者の立場をメソジストの教理にしたらどうかとの提案を受け (BE, 26:613 - 6)、終末論に関する論争がメソジスト内で行われ、ウェスレー自身も説教で後者の立場にも触れるようになりました。

千年期前終末論も千年期後終末論もイザヤ書 65 章で描かれる正義と平和の実現をそれほど遠くない未来で神が創造することを求めましたが、前者は人間による諸活動で新創造への移行が促進されることに関心を示さず、キリストの再臨が劇的に起こり、神の力で一方的に正義と平和が実現されると考えました。しかし後者は終末で人間の地上での変革活動に関心を向け、キリスト者を力づける聖霊の働きを前者が充分把握しなかったことを批判し、人間の変革活動達成のため、勝利する劇的なキリストの再臨を拒否したのです。

ウェスレーは先行の恵みに由来する人間の主体的応答性を強調し、義認前・後の聖

---

(16) 『ウェスレーをめぐる』第三章の第二節、3 を参照。

なる生活の実現、例えば治癒的聖化や貧困者自立支援活動のための応答的主体性を会員に勧めましたが、終末での被造物改革のための人間活動に関心を示さず、終末の出来事を個人的なキリスト者の完全の実現に求めたのです。しかし、人生の晩年の説教で千年期後再臨説に触れ、神の新創造の働きに関心をもち、この領域でもメソジスト運動が社会的・政治的力ではなく、聖霊の働きに積極的に応答する人間の主体性を述べたのです (BE、2：529f)。

#### 4. 千年期後再臨説の承認条件

ウェスレーは神議論の正当性を長期間疑っていました (BE、2：423 - 35, 499)。墮落した人間の再生と同様に、被造物が原初以上の状態に移されないならば、神はサタンに負けたことになると嘆きます。動物の原初状態は全て善・幸福で、動物の苦しみや死も罪も痛みもありませんでしたが、神が終末で動物をこの墮落以前の状態に戻すことを彼は拒否しました。しかし当時の「存在の秩序」の哲学的書物を学ぶことで彼は神議論の問題を解決しました。ウェスレーは『神の創造的知恵・自然哲学概論』(1777) を 19 年間かけて編纂しましたが、そこに自然主義者ボネの作品を抜粋しました。ボネによると、墮落した人間がこの世で動物に与えた悪の贖いとして、神は終末で動物たちを存在の秩序のより高い所に移行させ、人間が天使になるように、動物たちをも人間の理性・意志のレベル迄に高め、彼らに更なる偉大な能力を与えるのでした (Survey、4：73)。

デカルトの影響下で、動物虐待が日常的であった英国に対して、自然哲学者たちから多くの影響を受けた晩年のウェスレーは説教で動物福祉の徹底と動物の究極的救いを断言し、西方教会では希少価値であった動物神学や環境問題を先駆ける神学者になったのです。